

MIT の夜の公用語

鹿野 豊 (筑波大学システム情報系)

15 年ほど前、私は客員学生として、米国ボストンにあるマサチューセッツ工科大学（MIT）に滞在していた。私のデスクは、MIT の中心ともいべきキリアン・コートに面した Building 3 の 4 階にあった。機械工学科の二、三の研究室が共用する大部屋の一角で、小さな天窓が一つあるだけだった。時計を見なければ、朝なのか昼なのか、それとも夜なのかさえ分からなかった。

それでも、研究環境としては刺激に満ちていた。お昼代を浮かせるという不純な動機から、分野を問わずフリーランチ付きのセミナーに顔を出したが、そこで世界中から訪れる研究者と交流できただけでも、アメリカで研究しにきた価値があった。同じ分野の同僚たちが毎日のように新しい結果を出す姿にプレッシャーを感じながら、駆け出しだった私も毎月のように論文を書いていた。今では懐かしい思い出である。

毎日、昼過ぎになると、学内のコーヒーショップでダブルショットのエスプレッソを頼み、そのまま深夜まで MIT に残ることが多かった。昼間の廊下は、学生や教職員、さらには観光客でごった返していたが、深夜になるとさすがに静まり返った。それでも、勉強や研究に没頭する学生や研究者の姿は、夜更けにも見かけた。ある晩、トイレへ向かって廊下を歩いていると、ラジカセでラテン音楽を大音量で流しながら働く、スペイン語を話す清掃スタッフの一人に出会った。清掃道具が通路を少しふさいでいたので、

「May I pass through there? (そこを通ってもよいですか)」

と尋ねたが、反応はなかった。少なくとも、その場では英語で意思疎通ができなかった。別の日には、その人が私のデスクまで来て、

「¡Saca la basura! (ごみを出して!)」

と言った。意味が分からずにぼかんとしていると、足元にあったごみ箱を持っていかれた。毎日のように顔を合わせるうち、いつも音楽を流し、笑顔で働くその人たちと、片言でもよいから話してみたいと思うようになった。

「Hola, ¿cómo estás? (こんにちは。元気ですか)」

と声をかけたことをきっかけに、休憩用のお菓子を分けてもらったり、おすすめらしい曲を一緒に聴いたり、ほかの清掃スタッフも交えて身振り手振りで冗談を交わしたりするようになった。私はスペイン語をほとんど理解できなかった。それでも、その人たちの働く姿から、言葉を介さずに伝わってきたものがある。「この MIT の環境をきれいに保っているのは私たちだ」という静かな誇りである。自分に与えられた仕事を誇りをもって全うする、その姿勢だった。

渡米するまで私は、アメリカとは、競争を勝ち抜いて頂点に立つことが何よりも重んじられる社会だと、単純に思い込んでいた。しかし、その人たちの姿を見て、その理解が一面的だったことに気づかされた。卓越した研究や教育も、表には出にくい仕事を含む多くの人の協働があって、初めて成り立つ。一人ひとりが自分の役割を果たし、それぞれの仕事が見えない鎖のようにつながって、大学というシステム全体を支えている。その総体こそが、MIT を MIT たらしめているのではないかと、今でも感じている。

MIT から帰国し、東京工業大学で学位を取得した後、僥倖に恵まれ、研究職の道を歩んできた。しかし、その道を諦めざるを得ないかもしれないと感じた時期も何度かあった。その一つの時期に、JST の ERATO プロジェクトで、研究とプロジェクト運営をつなぐ「研究推進主任」という仕事を 1 年間務めた。正直に言えば、ちょうどその頃、研究者として生涯をかけたいと思える問題に出会っていた。研究への思いを抱えたままキャリアの方向を変えることになり、プロジェクトに十分貢献できたのかという悔いは、今も残っている。それでも、この仕事に従事していたことを今も誇りに思える理由が一つある。将来にわたって研究プロジェクトを支える基盤を整えようと考え、その仕事には、MIT の清掃スタッフの姿を思い出しながら、誇りをもって向き合えたからである。

これまで私は、多くの人に支えられながら、研究、大学教育、大学や学会の運営に携わってきた。関わってくださったすべての人の名前を、論文の謝辞に記したいと思うほどである。とりわけ、表には現れないところで誇りをもって働く人たちに、私は支えられてきた。AI や自動化が急速に進む現在、仕事はしばしば「どの作業を機械に置き換えられるか」という技術的な側面だけで語られてしまう。しかし、研究や教育を支える仕事の価値は、作業項目の一覧だけでは測れない。一つ一つの作業だけを切り出せば、標準化や自動化が可能なものもあるだろう。それでも、その場の状況を読み、周囲との信頼を築きながら、誇りをもって仕事を続ける力は、簡単に代替できるものではない。研究者は、普段は表に出ない人々の支えがあってこそ、本来の力を発揮できる。

私にとって、MIT の夜の公用語はスペイン語だった。それは同時に、昼の研究と教育を支える人々の誇りの言葉でもあった。そうした人々の存在に気づき、その仕事に敬意を払い、見えないつながりを紡ぎ続けること。それは、研究者が忘れてはならないことのひとつなのだと思う。



2019 年 3 月に懐かしくなって帰った MIT の当時のオフィス前の写真